

白道のカミリーノ便り

ケンバの大晦日①

常夏の国から豪雪の地へ

1年前の大晦日、東京から高速バスで来たケンバを広島県三次市に迎え入れた。相撲取りのように大きな体が日本人用の小さな座席に納まったのだろうか心配だった。

降り注ぐ雪、真っ白いコート、笑顔の白い歯、すべてが白一色の中に健康そうな黒い顔があった。

ケンバはカリブ海のバハマから来日し、横浜の英会話学校で先生をしていた20代の黒人女性である。ドミニカ共和国で知り合った。バハマは常夏の国で雪は降らない。アメリカで見たことがあり、これが生まれて2度目の雪だという。

豪雪なのでスキーに誘った。赤名のスキー場で特別大きなサイズの服を借り、ケンバ専用のコーチも頼んだ。私は腰痛だったので食堂からゲレンデを眺めた。

ケンバのスキーの先端を支えてコーチの女性が後ずさっている。2時間後も光景は変わらなかった。スキーを初めて体験したケンバは「すごく楽しかった」と笑っていたが、腰をずつかがめていたコーチがギックリ腰にならな

ったか私は心配だった。次はスキー場に近い「加田の湯」に行った。いくつか心配なところがあつた。まずお湯の温度である。

私のカミサンのベアトリチェは38度以上の湯は熱くて入れない。水で温度を下けることが出来る家族湯に行くしかない。美郷の近くに家族湯は無く、三瓶山を越えてラジウム温泉に行っている。日本の温泉や銭湯は興味深いけれど、お湯が熱過ぎて入れないという外国の人は多いようだ。

しかし妻の留守中にケンバと2人で家族湯に行くわけにはいかなかったらう。我が村の隣人たちが何と云うか想像するのも楽しいが……。(つづく)

陶芸家の橋本白道さんはスウェーデンやドミニカ共和国など世界各地に住んできました。「いつも道の途中」と語る白道さんのエッセー「カミリーノ便り」を金曜日に掲載します。カミリーノはスペイン語で「道」。住んでいる美郷町上野への思いも込めました。



橋本白道

佐賀県生まれ。京都で陶芸と出会い、備

前で修業後、故郷に窯を開いた。スウェーデンやリトアニア、ドミニカ共和国に滞在し、ドキュメンタリー映画や陶芸学校づくりに挑戦した。2007年、美郷町上野の空き家に、リトアニア出身の陶芸家ベアトリチェさんと夫婦で移住し陶芸工房を開いた。